今週の為替相場見通し（2022年7月19日）

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	（円）		135.99 ～ 139.38	138.56	137.00 ～ 140.00
ユーロ	（ドル）		0.9952 ～ 1.0183	1.0089	0.9900 ～ 1.0400
（1ユーロ=）	（円）		137.03 ～ 139.88	139.73	137.00 ～ 142.00
英ポンド	（ドル）		1.1761 ～ 1.2034	1.1870	1.1750 ～ 1.2050
（1英ポンド=）	（円）	＊	161.84 ～ 165.20	164.32	163.00 ～ 166.50
豪ドル	（ドル）		0.6683 ～ 0.6860	0.6793	0.6600 ～ 0.7000
（1豪ドル=）	（円）	＊	91.96 ～ 94.27	94.08	91.00 ～ 96.00

（データ）先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、＊印の項目はブルームバーグ。

1．米ドル

市場営業部　為替営業第二チーム　逸見　久貴

（1）今週の予想レンジ：　137.00　～　140.00　円

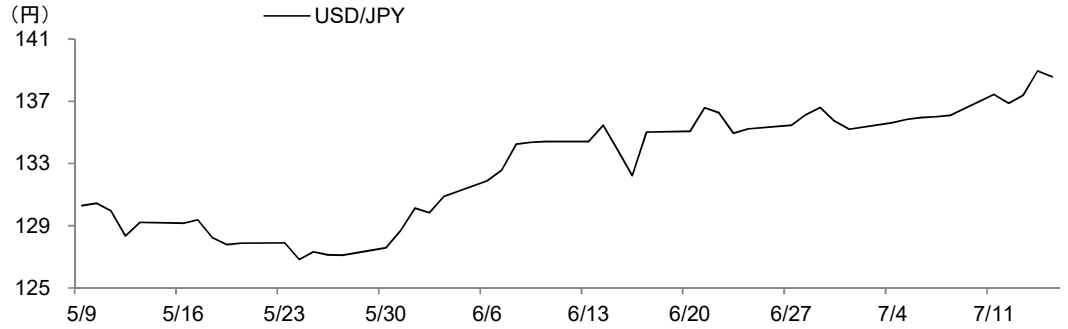
（2）ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は上昇。週初、136.30円付近でオープンしたドル/円は、米6月雇用統計の堅調な結果や参院選の結果を受けた政権安定運営を見越し、株式市場の上昇とともに買いが先行。137円台にのせた後も、世界的な景気減速懸念から、他通貨が下落する動きにドル買い優勢の流れが続きドル/円は137.75円まで上値を切り上げる展開となった。12日、米金利の低下や、株式市場の軟調な動きを横目にドル売りが先行。日米財務相会談も材料とはならず、136円台半ばまで値を戻した。13日、東京時間早々に137円を回復したドル/円は米CPI結果待ち一色となり様子見。注目の米6月CPIは、前年同月比で+9.1%と市場予想や前回（+8.6%）を大きく上回り、コアでも前回からの伸びを記録したことでドル買い反応となりドル/円は直近高値137.75円を上抜けると137.87円まで急伸した。14日、FRBの大幅利上げ期待感からのドル買いが継続。東京仲値にかけて138円を早々に試し、138円ちょうど付近でしばらくもみ合うも、午後に入ると138円の底堅さを見極めた実需のドル買いや時間外米金利の上昇を手掛かりとして急上昇。138円後半まで高値を切り上げた後も上昇の流れは止まらず、139円乗せし、139.38円（週高値）まで約24年ぶり高値を更新する展開となった。週末、高値更新の達成感からドル買いが一巡すると、中国第2四半期GDPの弱い結果も相俟って138円台半ばまで調整。米7月ミシガン大学消費者信頼感指数のインフレ期待が低水準となったことから、100bps利上げ期待がやや後退し138円台前半まで下落し、138.56円で越週。

今週は日銀金融政策決定会合（20日～21日）、ECB政策理事会（21日）を控える。今のところ日銀の緩和継続スタンスに修正が入ることは考え難い一方で、来週に75bpsまたは100bpsの利上げを見込む米国との金融政策差が改めて意識されよう。CPI発表後にタカ派と見られるFed高官らから75bpsを支持するような発言がなされているものの、FOMCまでに公表される指標次第では100bps利上げがメインシナリオとなる可能性もあり、ドル/円は一段と上昇する余地を残していると考える。加えて欧州では11年ぶりに利上げに踏み切る見込みである。景気減速懸念で一時パリティ割れするほど下落したユーロが買い戻され、クロス円が上昇すれば、ドル/円のサポート材料となるであろう。その他、19日（火）米6月住宅着工件数、21日（木）米7月フィラデルフィア連銀製造業景況感指数の公表を控える。

（3）先週までの相場の推移

先週（7/11～7/15）の値動き：　安値 135.99 円　高値 139.38 円　終値 138.56 円



（資料）ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部　為替営業第二チーム　甲斐　貴之

(1)今週の予想レンジ:　0.9900　～　1.0400　　137.00　～　142.00　円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

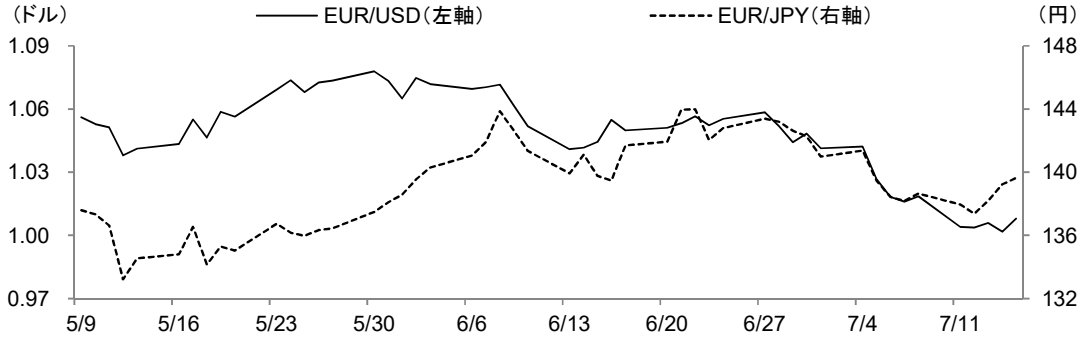
先週のユーロ/ドル相場は大幅に続落し、約20年ぶりにパリティ(ユーロ/ドル=1.00)を割り込んだ。週初11日、1.0165でオープンしたユーロ/ドルは各国中銀の金融引き締めによる景気鈍化懸念に加え、ユーロ圏でのエネルギー供給問題が強まったことから1.00台前半まで急落、先週つけた約20年ぶりの安値を更新した。12日、ユーロ/ドルは欧州経済の先行き不透明感や独7月ZEW景況感指数の冴えない結果が重しとなりじり安の展開。一時、パリティに迫る勢いで下値を切り下げた。その後は米金利低下に伴うドル売りやポジション調整の動きに支援され1.00台半ばまで反発した。13日、ユーロ/ドルは米インフレ指標の強い結果にユーロ売りが加速し、0.9998をつけ、約20年ぶりにパリティを割り込んだ。その後は米長期金利の急低下にドル売りが優勢となり、1.00台半ばまで持ち直した。14日、ユーロ/ドルは欧州経済の先行き不透明感が高まる中、米国の利上げ幅拡大の観測が強まり、再びパリティ割れの0.9952まで急落、安値を更新した。15日のユーロ/ドルも1.0025付近で上値が重く推移し、その後やや上昇し1.0089で越週した。

今週のユーロ/ドル相場は引き続きユーロ安地合いの継続を予想する。21日にECB政策理事会を控えているものの、すでに7月は25bp利上げ、7-9月にはマイナス金利終了を公表しており、一段のタカ派化が見られなければ、値動きとしては限定的となるかもしれない。それでも、19日のユーロ圏6月消費者物価指数(確報)が市場予想を上回れば、一段のタカ派化期待が織り込まれる可能性には留意したい。一方で、21日にはロシアがドイツに天然ガスを送るパイプライン「ノルドストリーム」が保守点検を終え、再開される予定である。政治的圧力などからロシアが供給を再開しない可能性もあり、供給が再開されない場合、原油価格の上昇、ユーロ売りが進行する懸念がある。ドイツの貿易赤字が顕在化している状況下、すでにユーロ/ドルはパリティを下回る場面も出てきており、一段のユーロ安には留意が必要な状況といえる。今週は19日(火)にユーロ圏6月消費者物価指数(確報)、20(水)にユーロ圏5月経常収支、ユーロ圏7月消費者信頼感指数(速報)、21日(木)にECB政策理事会、22日(金)にユーロ圏7月製造業/サービス業PMI(速報)が発表予定となっている。

(3)先週までの相場の推移

先週(7/11～7/15)の値動き:　(対ドル)　安値　0.9952　高値　1.0183　終値　1.0089

(対円)　安値　137.03　高値　139.88　終値　139.73



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

欧州資金部　藤原 海世

(1)今週の予想レンジ:　1.1750　～　1.2050　　163.00　～　166.50　円

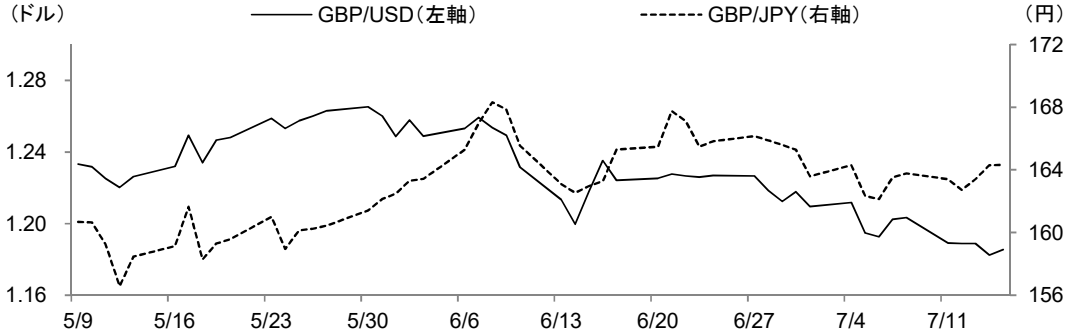
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は対ドルで下落、対ユーロ・対円で上昇。対ドルでは週初から下落基調を維持し、先週の安値である1.1877を割り込み年初来安値を2週連続で更新。対ユーロでは一時0.8403と5月17日以来の水準まで上昇したものの、その後は0.85近辺まで反落している。週初11日、対ドルで英ポンドは終日下落基調で推移。一時1.1868まで下落し、年初来安値を更新。8日の米6月雇用統計で米国経済の強さが示されたことに加え、上海でのコロナ感染再拡大によるロックダウン懸念に端を発したリスクオフ地合いとなりドルが選好された。翌12日、欧州天然ガス価格の上昇による景気減速懸念で欧州各国の国債利回りが低下。ユーロドル相場はパリティ(1.00)を試す動きに。この動きに追随する形で英ポンドは対ドルで1.1808、対円で161円台後半まで下落したものの、ユーロドルの反発や英中銀ベイリー総裁が次回8月の金融政策決定会合において25ベーシスポイントを超える利上げを行う可能性を示唆したことを受け、英ポンドも対ドルで1.1910台、対円で162.80台まで戻す。13日、欧州時間朝方に発表された英5月鉱工業生産指数が市場予想を上回るものだったことから対ドル、対円で英ポンドは上昇。その後、市場予想を上回る米6月消費者物価指数を受け、ドルが主要通貨に対して急伸し、英ポンドは対ドルで1.1828まで下落。しかし、米国債金利上昇が一服すると英ポンドも対ドルで1.1967まで反発。対円でも一時164.10台まで戻した。14日、欧州各国におけるエネルギー不足が経済活動に下押し圧力をかけるとの懸念からリスクオフの地合いに。ユーロドルもパリティを割れて一時0.9952まで下落する中、英ポンドにも下落圧力がかかり対ドルで1.1761と年初来安値を更新。一方、対円では円の下落圧力が対ドルでのポンド安圧力を上回り、165.10台後半まで上昇。対円での週初来高値を更新した。15日、英ポンドは対ドルで小幅反発。欧州時間は前日NYクローズ付近でのレンジ推移に終始していたものの、米小売売上高、ミシガン大学消費者マインド指数を受け1.1872まで上昇。米国債金利がカーブ全体で小幅に低下したことが材料となった。一方、対円では前日NYクローズ近辺値動き終始し、同レベルで越週した。

今週の英ポンドは、揉み合いながらも弱含む展開を予想。英国では雇用データ(5月ILO失業率、6月失業手当受給者数)に加え、6月消費者物価指数や6月小売売上高といった重要指標の発表が相次ぐ。目下、市場の関心の高い消費者物価指標は前年同月比+9%を超える伸びが予想されており、物価の高止まりが再確認される見込みとなっている。これはイングランド銀行の次回会合(8/4)での50ベーシスポイントの利上げを正当化する材料となるものの、英国短期金利市場では既に50ベーシスポイントの利上げを完全に織込んだ形になっている。一方で、小売売上高といった消費者行動を示すデータは減速感が見えるようになってきている。22日(金)にはGfk 消費者信頼感指数が発表される予定となっているが、このデータは前回6月分(-41)、前々回5月分(-40)と統計開始以来の最低値を2か月連続で更新している。仮に7月分のデータでも更なる消費者センチメントの落ち込みが確認される場合、早期景気後退入りが意識され今後の利上げ織込みの剥落とともに英ポンド安が加速する可能性も。尚、ジョンソン英首相の辞任に伴う与党・保守党の党首選ではスナク前財務相とモーダント通商政策担当相が他候補者に対し優勢を保っている。18日(月)には3回目の党所属議員による投票が行われ、21日(木)までには決選投票に進む2人が決定する予定となっている。しかしながら新党首が決定される9月5日(月)までには時間があり、各候補者の政策スタンスもまだ明確になっていない点も多いことから今週の相場に保守党党首選動向が与える影響は軽微であると考えられる。そのため、経済指標や既に高値圏にあるドル高の調整には注意が必要なものの、今週は英ポンド安方向の動きが継続すると見込む。

(3)先週までの相場の推移

先週(7/11～7/15)の値動き:　(対ドル)　安値　1.1761　高値　1.2034　終値　1.1870
(対円)　安値　161.84　高値　165.20　終値　164.32



(資料)ブルームバーグ

4．豪ドル

市場営業部　為替営業第一チーム　山岸　寛昭

(1)今週の予想レンジ:　0.6600　～ 0.7000　　91.00　～　96.00　円

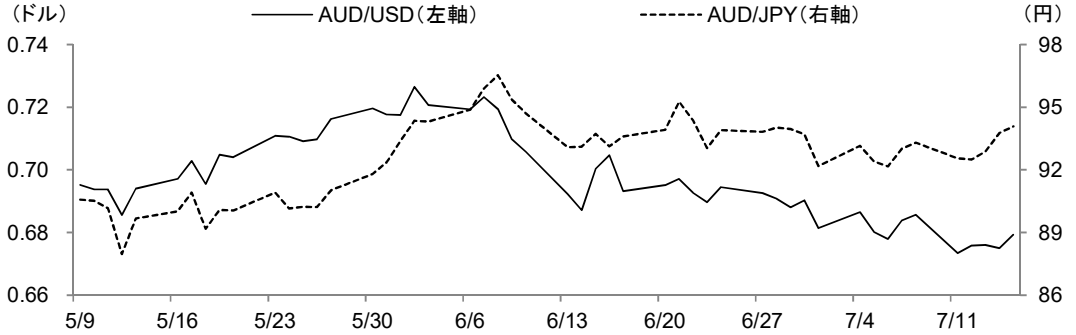
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は、ドル全面高のなかで軟調に推移。週初11日0.6858レベルでオープン。ドルが対G10通貨で全面高に推移し、ドルインデックスが2020年3月以来の高値、中国の再ロックダウン懸念が燻る中、米株先物と原油の下落も豪ドルの売り材料となり、一時0.6716まで下落。12日、シドニー時間は各豪センチメント指標が悪化し豪ドルは頭を押さえられながら推移。海外時間に中国の再ロックダウン懸念が意識され、豪ドルは安値を更新し0.6712まで下落。13日の豪ドルは0.6800付近まで一時買戻しが入るも、海外時間に発表された米CPIは+9.1％（前年比）という40年ぶりの高水準になり、FRBの利上げ観測でドル買いが強まると、豪ドルは0.6726まで下落。ドル買いが一巡すると、豪ドルは再び0.68台に乗せ、NY引けは0.6760近辺で推移。14日の豪ドルは強い豪6月雇用統計結果で0.6785近辺まで上昇するも、海外時間は米6月PPI最終需要（前年比）+11.3％と高い伸びとなったことでドル買いとなり、豪ドルは安値を更新し、一時0.6683まで下落。その後ウォラーFRB理事による0.75%の利上げ支持で安堵感が広がり、株式が下げ幅を縮めると0.67台半ばまで戻し、NYクローズ。15日は米ミシガン大学消費者信頼感指数で期待インフレ率が低下したことを受けて、米金利低下とともにドル売りが進み、豪ドルは0.6793で越週。

今週の豪ドルは強弱材料交錯するなか、軟調な展開を予想。テクニカル的には、先週連日で安値を更新し、支持線となっていた5月の安値0.6829レベルも下抜けたことで、下値のめどが見えづらくなっている。先週豪ドル売りの材料となった世界的な景気減速懸念、最大の貿易相手国である中国の再ロックダウン懸念は、引き続き燻っている状況。それと関連して株価、原油などの資源価格が軟調に推移するなかで、豪ドル売りが再び強まる可能性がある。短期的には下落方向を見る参加者が多いのか、IMM投機筋の豪ドル売りポジションも足元拡大する方向。また今月5日のRBA声明文では、「家計消費の強い伸びを見込む」との文言が削除され、不確実性の一つに家計消費動向があるとして、「家計は価格高騰や金利上昇からの圧力を受けている」との認識を追加。豪州経済も高インフレと金利上昇からの景気減速懸念が意識されている。一方で豪ドルのサポート材料もあり、一方的に売り込まれる展開も見込みづらい。先週14日の豪雇用統計は雇用者が予想を大きく上回り、失業率は1974年以来となる3.5％まで大幅に低下。強い雇用がインフレ圧力となり、次回8月RBAでは一部で50bpを上回る利上げ幅を見込むなど、今後の継続的な利上げ観測が豪ドルを支えそうだ。インフレ見通しについては、5日RBA声明文で、年後半にピークアウトするとしている。今後のインフレ・金融政策動向を見極めるうえで、今週19日（火）発表のRBA 議事要旨、20日（水）ロウRBA総裁講演、来週27日（水）発表の豪第2四半期CPIに注目したい。

(3)先週までの相場の推移

先週（7/11～7/15）の値動き:　（対ドル）安値　0.6683　高値　0.6860　終値　0.6793
（対円）安値　91.96　高値　94.27　終値　94.08



（資料）ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。